

原風景と創造力

大阪カスエネルキ-文化研究所
客員研究員 弘本由香里

夏の終わりの一こまに、大正時代に大阪・上町台地界隈で幼時を過ごし、長じてグリコのオマケ係として独自のオマケ文化を生み出した、故・宮本順三さんの足跡をたどるお話の会を催した。講師は、「宮本順三記念館豆玩具舎（おまげや）ZUNZO」の副館長で順三さんの長女・樋口須賀子さん。

順三さんの幼時の原風景は「上町のろうじ（路地）」に始まり、数々の社寺の縁日で売られていた、縁起物の張子人形や生玉人形などの郷土玩具との出会い、駄菓子屋のあてもん、周辺の野原でのトンボやイナゴ捕り、木の实採りなど、厚みのある多様な環境・文化との交わりに満ちている。

そんな原体験の中でも、飛び切りの印象を残しているもののひとつに、かつて四天王寺の春秋の彼岸の見世物として人気を博していた、「たこ踊り」と「たこたこ眼鏡」がある。カットレンズ付きの眼鏡を借りて、愉快的たこ踊りを覗くと、無数のたこが現れるという趣向だが、画家の小出権重や生田花朝など、そうそうたる面々もその記憶を描き残している。

順三さんの心に刻まれた「たこ
たこ眼鏡」は、後に大ヒットする
小さなレンズとなり、物資の戦
出ずとも水滴がレンズ代わりの
には、水が流れていない夢と遊
ケも、枯渴しなやちの豊かさ
も、続ける、幼い日あること
は、幼い日あることに気づか
りの中にあること。
のである。